

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minakoginga@gmail.com

(連絡用)

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



## 2013. 野幌から秋便りです。

すっかり秋が深まりましたがお元気ですか？

ここで立ち止まってはられないのですが、心が風邪を引いて動き出せない自分に歯がゆさを感じる2ヶ月でした。

10月20日、コラムニストの天野祐吉さんが亡くなりました。水曜日の連載「CM天気図」を毎回楽しみにしていました。軽妙でユーモアがあるけれど辛辣でした。「『人に会う』ことは『言葉に会う』こと」だと多くの人と交流された天野さん。コラムで「いまこの国は景気さえよくなれば、憲法を変えようが原発を再稼働させようが『ええじゃないか、ええじゃないか』の空気にあふれている」（13年7月3日付朝日新聞）と書きました。緊急入院されてからもコラムを書く意欲を失わなかった事を知りとても励まされました。

ご近所で親しくしているYさんは、突然の重い病気のため、数回にわたる入院治療を受けて、9月に自宅に帰ってこられました。筆舌に尽くしがたい治療に耐えて寛解して今は普通に暮らしています。Yさんは、我が家のナナカマド（下の写真）に励まされたと言います。どこにでもあるナナカマドですが真っ直ぐに空を突くように伸びて、なんだかこの木を見ているとおおらかな気持ちになるのです。20年もの間、我が家の歴史を見守り続けてきたナナカマド。もうひとりの家族になりました。



10.3 ナナカマドの真っ赤な実が青空に映えて

ひよんな出会で 泊原発の廃炉をめざす会の賛同人に加わったヒロミさんは20代後半の女性です。自然が大好きで、豊かな感性を持っています。銀河通信をHPで熱心に読んで感想を寄せてくださいました。

「25年間書き続けて来られたことに、『継続とはかなり』

という言葉の意味を実感させていただきました。

銀河通信を読みながら、このインスタントな情報社会、今のことしか考えさせない風潮の中で、時間に追われてただ働き詰めだった毎日の生活を思い出していました。

樋口さんの文章から滲み出る優しさと決意に『私ももっと丁寧に生きたいなあ』と思い、周囲の情報に翻弄されずに自分のリアルな生活から発信していくことの大切さを改めて感じました。と丁寧なメールを頂きました。

息子も含めてこの世代の若者は、ずいぶん生きにくい世の中で、私たちとは違う苦勞をしていると思います。大学を出ても、定職につけない人たちの話をいくつも聞きます。

私たち団塊の世代は市民運動をしている人も多いです。20代の頃、学生運動が盛んでした。大江健三郎の「見るまえに跳べ」という小説がありましたが、まさに私もそんな一人でした。行動しながら考えたのです。

今はインターネットを自由に使いこなして、発信してつながって運動を広げている若者も多いようです。古いも若きも手をつないで、平和で原発のない社会にしていきたいですね。原発を語ることがタブーになってい近頃そんな風潮に抗したいです。



9.23 快晴の旭岳の姿見の池



9.21 八剣山でスケッチを楽しむ

「私たちの未来と原発」に参加して

憲法と吉里吉里国



9月14日、札幌市民ホールで行われた小出裕章さんの「私たちの未来と原発」と題する講演会に1500人以上が参加し、会場は原発をなくしたいという思

京都大学原子炉実験所助教・小出裕章さん

いで溢れました。

これまで長い間、原発事故を防ぎたいと訴え続けてきた小出さん。自分の力は届かず福島事故が起き、2年半がたっても未だ収束の目処さえたっていない現実があります。

福島第一原発の高濃度汚染水問題は「コントロールされている」と明言した安倍首相ですが、小出さんは「今なおコンクリートの割れ目から汚染水が漏洩している、とみるのが妥当だ」とも語り、汚染水問題の解決が極めて難しいことを、説明しました。

「18世紀末に英国で起こった産業革命を機に、人類のエネルギー消費量がぐんと増えた」と述べ、豊かさを享受するために、自然環境の破壊を重ねる人類の増長を振り返りました。敷地内はすでに『放射能の沼』と化しているのではないかと云います。汚染水を貯めるタンクを作ってますが、被曝するのでゆっくりと作っている余裕はありません。タンクから漏れるのは当然で、汚染水があちこちから漏れているのが現状だと訴えました。

「水を使い続ける限り、汚染水は増え続ける。今のよう状況は何としても変えなくてはなりません。重要なことは冷やすこと。小出さんは金属で冷やすことを提案しています。チェルノブイリのように石棺にするしかないのではないかと？」

今回の事故で大気中に放出されたセシウム137の量は、広島原爆168発分に相当する。ほとんどの放射能は西風に乗って太平洋に向かい、米国にまで達したのです。

地球は有限だから、地球の人類がすべて「工業文明国」なみのエネルギーを使おうとすれば、地球の生態系を破壊すると警告しました。何が本当に大切なのかということを考えて生きていくことが大切と強調されました。

8月24日、医療九条の会の主催で「憲法と吉里吉里国」と題する講演会が開かれました。

九条の会の事務局長である小森陽一さん（東大教授は「吉里吉里人」の朗読を東北弁で始めました。井上ひさしさんの名作です。日本が新自由主義路線に転換していった時代に、コメと憲法に危機感を持って書いた小説を現代と対比して憲法の意義を語りました。

国家が国民を縛り海外へアメリカの手下となって派兵出来る憲法に変えようとしている危険性について説明しました。『国際社会のために』という文言が『アメリカの平和のために』という解釈になると

か。文面の裏側に隠されている中身を知ることの大事さが理解できました。小森さんは言葉を疑い、言葉でたたかってきた文学者でもあります。

6年前に憲法改悪を阻止しようと九条の会ができました。



各地にその輪が広がり、草の根の運動で憲法改悪をくい止めました。「何としても改憲したい安倍政権ですが、草の根の対話を広げて、憲法改悪を押し返しましょう」と結びました。

憲法の本がたくさん書店に並んでいます。私ももう一度読み直してみようと思います。

特別報告は、朝日新聞の函館支局長の植村隆さん。「坂本竜馬のデモクラシー」と題して坂本竜馬のおいで自由民権家の坂本直寛らが北海道に渡って、人民主権を打ち立てたことをスライドを使って紹介しました。直寛の反骨精神は龍馬を彷彿とさせます。

今の憲法につながる思想を持ち、実践した人がいたことに感動しました。私たちが憲法を守らなければと思いました。

医療九条の会の講演二つ参加して、企画力と、人を集める努力に敬意を表したいと思います。インターネットでも講演内容を知ることが出来る時代ですが、講演者と聴衆とが一体になる感動は、行動に結びつく原動力ですね。

脱原発の思い集めて  
友の会 樋口 みな子 (江別市)  
小出裕章さんの講演会(4面参照)は1500人以上が集まりました。立錫の余地もない会場を見て「脱原発」を願う人たちがこんなにいるんだと驚きました。生命が根付くことのできた希有の星、地球を私たちが守らねばと気持ち新たにしました。



7.11黒岳のイワヒゲの群落

## みな子の山旅日記

秋も深まり、夏山も終えようとしています。さまざまな行事と重なり、山のお誘いを受けても8月以降に登った山は羊蹄山、八剣山、旭岳、下北半島の縫道石山だけでした。

来年は、もう少し体力をつけて、登ったことのない山に挑戦してみたいと思います。一緒に登れる友人がいたら心強いですね。

### 天空に突き立つ山 下北半島の縫道石山 (626m)



10.13 国道から望む縫道石山

日本山岳会の東北集会有り、10月12日に函館からフェリーで大間港に渡り、むつでの集会上に北海道から5人が参加しました。

下北半島といえば

深沢七郎の「檜山節考」の世界。荒涼とした岩山を登っていくと、この世からあの世の世界に足を踏み入れた気持ちになりました。

翌日13日は縫道石山登山。14時のフェリーに乗

る都合で、私たち4人は車で、むつ市内から佐井村の縫道石山登山口に向かいました。かなり狭いカーブが続く道路を50kmほど進み、やっと登山口に着きました。



杉林を歩く

東北百名山の縫道石山はその特異な姿から「入道石」と呼ばれているそうです。小雨が降っていて雨具を装着して8時5分出発。ブナ林の中を進みます。樹間から縫道石山が見



10.13縫道石山頂上で

ました。杉林からヒバ林となり、勾配が徐々に増していきますが、北海道にはない杉やヒバが美しく、森の空気が美味しい。倒木が登山道を塞いでいるところが数箇所あり、小さい私は難儀しました。道は次第に急峻となり、周辺には露出した岩が多くなり今にも崩れそうな大岩を過ぎると岩場の急登です。高度を上げると突然視界が開け、そこが山頂でした。

9:35到着。(山頂写真と杉林の撮影・鈴木貞信さん) 曇空でしたが函館山が見えました。小さな山でしたが、本州最北端に気高く屹立する縫道岩山の自然の豊かさに触れ、とても楽しい登山でした。



大間港から建設中の大間原発を見る

## 快晴の旭岳 (2290m)

9月は雨の多い日が続きました。3連休の9月22日、旭岳に仲間3人で登りました。

雲一つない快晴で、紅葉も見頃でロープウェイ乗り場は長い列が出来ました。姿見の池からは雲の合間から一瞬、旭岳が姿を現すと、観光客



かでした。

からどよめきが起きました。

快晴の旭岳は久しぶり。なんと頂上には80人もの登山者で賑や



9.22旭岳頂上付近から見る姿見の池(上写真)と頂上

7月20日は花の名山、富良野岳に登りました。高山植物がいっぱい。登山者は200人はいたように思います。

花パトロールもしています。年々少なくなっているエゾリリソウが絶滅するのではないかと心配です。



右写真・エゾノハクサンイチゲ

7.20  
ウズラバクサンチドリ



# 本 Books



## 〈ルポ〉原発はやめられる ドイツと日本 その倫理と再生可能 エネルギーへの道

小坂洋右著 寿郎社 1700円＋税

著者の小坂さんは、現場主義を貫く北海道新聞の記者です。

序章で小坂さんは、1992年に訪ねたチェルノブイリ事故で深刻な放射能汚染を被ったベラルーシで大量の被曝を経験しながら「リトアニアの原発は必要だ」と語る普通の市民の姿に「こんなことが許されているのか」と思ったと記します。

2012年、福島原発事故現場を間近に見た衝撃と絶望感は、ベラルーシを取材した時とまったく同じだったと明かします。

本書は、原発に頼らない社会に変わろうとするドイツ、そして福島と、足かけ12年の取材をまとめたリポートです。

ドイツは、福島の事故後、全原発の廃止を決めました。そのプロセスも多くの関係者に取材して詳細に伝えています。脱原発を決定した倫理委員会の委員を訪れて、日本との違いを鮮明にします。ドイツの倫理委員会は原発の是非を議論するに当たって、ドイツ社会がめざす未来の目標を「保護された環境」「健全な経済力」「社会的正義」の三点にまとめたことを紹介します。ドイツでは1970年代から「原発は民主主義を阻害するものだ」という議論があったと言います。政治的にも市民的にも議論してきたドイツ。それに対して日本は未来へのビジョンなどまるで持ち合わせていないとしかいいようがありません。

原発反対運動から、環境保護運動へと市民運動が広がっていったドイツ。再生可能エネルギーの取り組みは、脱原発が決まる前から市民レベルで実践されてきたし、雇用さえ生み出しているのです。フライブルクで環境ジャーナリストとして活躍する今泉みね子さんは日本とドイツのどこに違いがあるのかという小坂さんの問いに「日本では、戦争中に日本が何をやったか戦後、学校で教えなかった。でもドイツはきちんと教えている。日本では戦争への反省が伝わっていないから、自分たちは社会をつくっているという意識が希薄になる。日本で大衆運動が根づかなかった原因の一つのような気がする」と答えています。私も市民運動に加わっているが、広がっていかないのは何故だろうという思いがいつもあります。

小坂さんは反原発を封じた「電源三法」について言及しています。原発の立地が決まると目がくらむような交付金が地域を潤し、雇用も生まれるため、反対できない雰囲気生まれたという事実があります。

しかし、福島で事故は起きたのです。原発事故はコミュニティも人間関係も分断していく現実を前に、原発事故は他の事故とは異なる特異性があることを指摘しています。

同時に、再生可能エネルギーの現実性をとらえ日本でも可能性があることを実証的に訴えます。

ドイツの倫理から原発の是非を問う姿勢を、小坂さんはたくさんの人から聞き出して、日本でも再生可能エネルギーに転換できるのだと確信します。

どの章から読んでも、「原発はやめられる」という検証が、環境保護、経済性、民主主義を守る倫理からと多角的に行われていて、勇気づけられました。

## 加藤幸子自選作品集3

加藤幸子著 未知谷 3600円＋税

本書は加藤幸子さんが選んだ作品集全5巻の1冊。収録されているのは「ぼくのクオ・ヴァディス」「翡翠色のメッセージ」「鳥たちの後に・・・」「雀遺文」「渡鶴詩」「アズマヤの情事」「ジーンとともに」の7篇の短編です。「ジーンとともに」は鳥の視点で描かれています。まるで、加藤幸子さんが鳥になったかのようで、鳥の生態を観察してきた作家ならではの作品です。

卵の殻を突き破って地上に生まれでた渡り鳥が飛行し、やがてひなを産みます。姿が見えない内なる声（ジーン）に導かれ、旅を続ける鳥の感情がきめ細かに描かれます。

たくさんの著書がある加藤幸子さん。私が好きな作品は祖母の視点から一族の変遷を見つめた「家のロマンス」や北京に住んでいた頃の隣人である男性との再会を描いた「長江」、都市の『ほんものの自然』を取り戻そうと奮闘した「鳥よ、人よ、甦れ」など多数あります。

自然を観察する目は、人間に向ける透徹な目につながっていて、いつも読後に清々しい気持ちになります。

生き物が大好きな加藤さんは、あるインタビューで「原発と憲法改悪が許せない」と答えています。「原発の事故で被害を受けるのは人間だけではない。地球上の生物全てが汚染される。あらゆる生物を支えているのはミミズやバクテリア類で私はミミズに変わって怒りたい」と発言しています。

ほんやりと自然を眺めてきただけの私。加藤さんの瑞々しい表現にいつも心が洗われます。是非加藤幸子ワールドに触れていただけたらと思います。

本を読んだのに何が書いてあったのか、すっかり抜けてしまい再読しました。そうしながら、ようやく自分を取り戻していきました。文章が散漫なことをお許し下さい。原発やハンセン病（次ページ）は伝えていかなくては、また同じことを繰り返すのではないのでしょうか？新聞の書評は圧倒的に話題作ばかりです。だからこそ、こんな小さな通信ですが、読んでいただけたらと願いながら地味な本もご紹介しています。（みな子）

## ハンセン病

差別者のボクたちと病み棄てられた人々の記録

三宅一志・福原孝浩著

寿郎社 2000円+税

## ハンセン病

差別者のボクたちと病み棄てられた人々の記録

三宅一志・福原孝浩著  
寿郎社 2000円+税

## 蘇生した魂をのせて

石牟礼道子著 河出書房新社  
1800円+税



全国13ヶ所の国立ハンセン病療養所。その取材を朝日新聞記者を定年後も続けてきた三宅一志さんと人権問題に長年携わってきた福原孝浩さんが、明治から今日まで続いた「医療政策の闇」に分け入り記録し、療養所入所者たちの過酷な人生を聞き取ったのが本書です。

1章「癩患者・家族を『にんげん』と見ず『生殺し』にした医学・国策の冷血」で、三宅さんは国策としてのハンセン病対策の差別構造を告発。朝日新聞香川版に「ハンセン病の軌跡―大島青松園」を連載しました。その思いをこう書いています。「連載で私は徹頭徹尾、入所者側に立ち、公正中立とされる『客観報道』を避けた」。「圧倒的な人生丸ごと被害者」である元患者の暮らす現場（療養所）に立てば客観的に伝えることなんかできない」との思いからです。

35年前、三宅さんが連載していた頃、作家の田宮虎彦さんがハンセン病の取材をされていたことも明かし、世に出ていたらハンセン病への認識も変わったのではないかと記しています。（田宮さんは未完のまま自死）

2章「病み棄てられて」は、三宅さんと福原孝浩さんが、全国の療養所を訪ね、差別と偏見で人権を蹂躪されたそれぞれの人生を刻んでいます。1950～60年代に全国の国立療養所に約1万人いた入所者は、今年5月時点で1993人に減っており、平均年齢は83歳を超えています。

「次の世代に伝えていかなければ、入所者たちの過酷な体験が忘れられてしまう」と、11年3月から11人の実体験の聞き取りと執筆作業に取りかかり出版にこぎつけました。

私がハンセン病患者が北海道にもいらしたことを知ったのは10数年前でした。青森の療養所でお話を聞く機会があり、家族と断絶させられた苦しみや、寒さに凍えながら、療養所で作業をした話などを伺いました。その時のことを思い浮かべながらこの本を読みました。

最近でも、熊本県の黒川温泉での宿泊拒否など、入所者への差別は続いています。

1953年から隔離規定見直しが予定されていたがなぜ96年まで「らい予防法」は廃止されなかったのか。著者の怒りと悔恨がひしひしと伝わります。それはまた「差別者たるボクたち」の問題でもあることを問うています。

石牟礼道子さんは『苦海浄土』という貴重な記録文学を書いた作家です。

水俣からの言霊「破壊し尽くされた自然や人間の悲劇とその闇の奥底に立ち上がる新しき叡智。受難の時代に響く、珠玉の対談・講演集」が本書です。（帯文を引用）

「『闘う民衆』の姿を水俣の患者さんに見出して、自分たちの幻想を患者さんたちに預けてしまっているのではないか。略 そうして患者さんたちひとりひとりが、どういう日常の中におられるか、どういう苦しみの中で一夜を過ごされるのかというのを、あまり想像しないのではないかと話す石牟礼さんの言葉にハッとさせられました。私もそんなひとりではなかっただろうかと。

体の中に水銀を貯（た）めざるを得なかった患者の苦しみはいまだ終わってはいないのに、患者さんたちは「私たちがこれだけ苦しんだのだからもうこの苦しみは誰にもさせたくない。許す」とまでいうのです。

魂の行き場所がないのだと語る患者さんたち。それにどう答えたらいいのだろう。公害とはなんだろう。原発事故も公害です。

過去の公害の歴史を忘れてはならないと、水俣病の患者さんたちは、存在そのもので公害のもたらした苦しみを訴えていると、私はこの本から聴こえてきました。

抗議運動を続けて来た患者さんたちが、「自分たちの絶対的な加害者のために祈る」とおっしゃる。それはどれほどの苦難からしぼり出された深く重い言葉だろうか。私たち自身が水俣から学び直さねばならないと思います。



山口果林  
とわたし  
安部公房

## 安部公房とわたし

山口果林著 講談社1500円+税

女優の山口果林さんがノーベル文学賞候補作家・安部公房との20数年に

わたる秘められた愛の日々を初めて告白したのが本書です。

出会ったのは1966年、大学1年の時でした。安部公房は40代で23歳の歳の差がありました。その後、俳優座に入り、果林と命名したのは安部公房でした。

この本に関心を持ったのは、私も学生時代、すいぶん安部公房の「砂の女」や「箱男」など、今までの文学とは違う斬新さに引き込まれたからです。

やがて、安部公房は妻と別居して一緒に暮らすのですが、その事実は一部の編集者にしか知らされていませんでした。何よりノーベル文学賞に一番近い作家として、スキャンダルになることを恐れたようです。果林さんは「透明人間」にされたと表現します。（6pに続く）

俳優座にいた頃、安部公房の妻と同席したときの苦痛を「体中に湿疹ができた」といい、当時、NHKの連続ドラマ「繭子ひとり」に出演していた頃で「皮膚科に通ってなんとかしのいだ」というエピソードが語られます。

安部公房は68歳で急死。前立腺がんでした。入院するまで、果林さんのマンションにいたのにその後は安部公房の家族から拒絶されます。葬儀には出席しませんでした。周りは遺族に配慮し、安部公房とのことはなかったことにされた果林さん。

安部の妻も死去、し没後20年の節目となった今年、名誉回復をはかり、安部を深く愛し、愛された女はここにいる、といたかったのだと思います。でも情に流されずむしろ淡々と振り返っています。本の中で、変わったモノが大好きで通販をよく利用していたことや、大の車好きだったことなどが語られ、箱男の世界とは違う、知られざる安部公房の一面を伝えています。大作家と呼ばれるその重圧を癒したのが果林さんだったのでしょうか。安部公房の死後、スキャンダルから守った果林さんの姉や母などの家族に心打たれました。

その後の人生を、颯爽と生きていて、透明人間にされた悔しさを晴らした姿が素敵です。

## 少年H

降旗康男 監督



作家・妹尾河童の自伝的小説で、上下巻あわせて340万部を突破するベストセラーを、降旗康男監督が映画化。

映画は原作に忠実

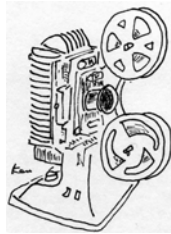
で、登場人物の配役はぴったりでした。

太平洋戦争下という時代に翻弄されながらも、勇気や信念を貫いて生きた家族の激動の20年間を描き、実生活でも夫婦の水谷豊と伊藤蘭が夫婦役で息もぴったり。昭和初期の神戸。名前のイニシャルから「H(エッチ)」と呼ばれる少年・肇は、好奇心と正義感が強く、厳しい軍事統制下で誰もが口をつぐむ中でも、おかしいことには疑問を呈していく。Hはリベラルな父と博愛精神に溢れる母に見守られ成長します。

「戦争はいつか終わる。その時に恥ずかしい人間にならなったらあかんよ」と、スパイ容疑で逮捕されて拷問されて帰宅した父親が、初めに告げる言葉に胸が熱くなりました。戦争を、素直な少年の目で描いています。素直な疑問を呈することもできなかった時代の怖さ、恐ろしさを感じました。

秘密保護法案が通ったら、何気ない会話さえもが秘密事項として逮捕されるのだと、背筋が冷たくなりました。

自由が奪われ、お互いを監視し合う社会は民主主義に反するものです。庶民の目から見た戦争を記録し多くの人に知ってもらおう映画は記憶に残ります。時代に流されず、平和を願い行動した勇気ある家族の歴史に感動しました。



今年2月に83歳で亡くなった岩波ホールの総支配人・高野悦子さんの追悼上映会が3週間ありました。

高野さんの自伝を読むと、岩波ホールの開館当時、女性で大丈夫かと心配されて奮起。世界の名画を発掘・上映

するエキブ・ド・シネマ運動を生涯に渡って育てました。私の尊敬する女性です。

シアターキノでもたいていは観ることができますが、なかなか上映日と私のタイミングが合わなくて見逃した映画も少なくありません。

高野さんが選んだ、女性監督作品を1本でも観たい。高野悦子さんを追悼したいと、映画と講演会に合わせて10月25日上京しました。

## ローザ・ルクセンブルク

86年西ドイツ

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督



19世紀末から第一次世界大戦の時代に、人間解放と平和主義を目指して闘った偉大な女性思想家ローザ・ルクセンブルク(1870-1919)。彼女の情

熱的で波乱に富んだ生涯を、魅力的な人間像に重きをおいて描いた感動作。ローザを演じたのはバルバラ・スコヴァです。

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督は、史実に沿って真実のローザの生涯を描きました。反戦活動をしていたローザは、第1次世界大戦が勃発すると有罪判決を受け、3年半収監されます。一方で動物や植物を愛したローザは革命の同志より「小鳥が友達」とつぶやく姿が印象的。

生涯の同志で、一時は一緒に暮らしたヨギヘスに「君は母親になるか革命家になるか選ばなければいけない。君の仕事は思想を生むこと。それこそが君の子供じゃないか」の言葉を複雑な気持ちで受け止めます。分かっているだけでも5度投獄されたローザ。檻の中から彼女は文書を送り続けて仲間を励ましスパルタクス団(ドイツ共産党の前身)を結成します。『社会主義の危機』を匿名のユニウスで出版し、党の戦争協力を糾弾したのも獄舎の中でした。党はますます右傾化し、戦争の脅威が影を濃くしていく中でローザは各地で反戦を訴えます。情熱的な演説が印象的。そして時代は着実に戦争へと突入していきました。

ほとんどを捕らわれのうちに過ごしますが、獄舎の一角に小さな花壇を作って楽しみ、愛猫の死に涙を流すローザの優しさも描かれます。

1919年1月15日、ローザは右翼軍人に拉致され、殴られた上に至近機より撃たれ、運河に捨てられました。47歳の生涯でした。100年を経た今もローザの思想と温かな人柄は、多くの人々を惹きつけているそうです。

ひたむきに平和のために闘ったローザに勇気をもらった映画でした。平和憲法を守るために行動をし

## ハンナ・アーレント

ドイツ・ルクセンブルク・フランス  
マルガレーテ・フォン・トロッタ監督



第二次世界大戦中ナチスの強制収容所を脱出し、夫とアメリカに亡命したユダヤ系ドイツ人の哲学者、ハ

ンナ・アーレント（バルバラ・スコヴァ）は1960年、ナチスの戦犯アイヒマンの裁判を傍聴。そのレポートを週刊誌の「ザ・ニュー Yorker」に発表する。アイヒマンの裁判についてハンナの考えを述べた記事は、多くの非難を浴びます。ハンナは、アイヒマンを極悪非道な犯罪者ではなく、平凡な人物であると考えます。どこにでもいる人間の中に「悪の陳腐さ」を見たのです。結果、多くのユダヤ人からの批判がアンナに殺到します。

アンナは、ユダヤ人の中にもナチスに協力した人たちがいたことを知っていました。

この映画で、当時のアイヒマンの裁判の実写フィルムが使われて、臨場感たっぷり。

戦争とは何か、なぜ人は殺し合うのかという単純な疑問に、ハンナは答えを提出します。諸悪の根源は、人間が思考を停止し、立場上、命令に従うだけの人間となること。つまり、人間としての善悪の判断思考の停止が、悪や暴力、大量殺人を生むと訴えます。ハンナは、長年の友情も絶たれ、孤立無援になりながら、信念を曲げません。ラスト近く、ハンナは大学で講義します。学生たちへの言葉はハンナの思想が集約されていました。そのスピーチは圧巻です。映画の中の学生たちと、私たち観客が、一体になったような感動に包まれました。事実から目を背けず、考えることを放棄してはならないと訴える姿は強く美しい。ドイツ映画はいつも凄い！

監督・脚本は、ドイツ共産党を創設したローザ・ルクセンブルクの生涯を描いた「ローザ・ルクセンブルク」を撮った、マルガレーテ・フォン・トロッタ。ローザに扮したバルバラ・スコヴァが、本作でハンナを演じているのも話題になりました。知的で毅然としたハンナに憧れます。

高野悦子さんは、困難にめげずに信念を貫く女性が好きでした。

本作は新作ですが、考えることをやめてはならないというメッセージが心に響きました。

## クロワッサンで朝食を

フランス・エストニア・ベルギー  
イルマル・ラーク監督



フランス映画界が誇る大女優ジャンヌ・モロー主演による、気難しいフリー

ダが家政婦に心を開いていく物語。

長い介護生活の末に母を看取ったアンヌ。そんな彼女のもとに、あこがれの街パリでの家政婦の仕事が舞い込みます。しかし彼女を待ち受けていたのは高級アパートでひとり寂しく暮らす、気難しい老女フリーダでした。そもそも家政婦など求めているフリーダは、アンナを冷たく追い返そうとしますがアンヌを若き日の自分と重ねるうちに心を開いていきます。

フリーダは本物のクロワッサンを教え、パリのファッションを語るのです。アンヌが深夜にパリを散策。私たちの知らないパリの魅力を、さりげなく伝えます。85歳のジャンヌ・モローの存在感に圧倒されます。老いても自分の世界を持ち、いつも素敵な洋服で身を包み、息子ぐらいの歳の恋人がいるのも、不自然には思えないのですからすごい。

アンヌが、日を追うごとに、洗練されて素敵になって行くさまが楽しかったです。

## 小さな旅

今回の小さな旅は、10月25日、神保町の岩波ホールに行くことと、市ヶ谷にある山岳会の小さな部屋で、ローゼ・レッサさんの生涯（8ページ）を聞くことでした。

方向音痴で、電車の乗り間違いを何度も経験しているのに、インターネットで事前に電車の乗り継ぎをメモして出かけました。

山岳会では、かつて一緒に活動した自然保護委員のメンバーにも出会えて、嬉しかったです。

26日は鎌倉の友人朋子さんと映画を一緒に見ました。終日、雨で外を歩く人は少なめ。古書店がたくさん並ぶ神保町は静かで好きです。辞書の世界を描いた「舟を編む」の舞台はこの辺でしょうか？



右写真・神保町の歴史ある喫茶店前で

## これからも書き続けます

私が死んだら、2本の赤いバラを持たせてください。1本は私のために、もう1本は健治のために。



法政大学講師時代のローゼさん

写真提供・法政大学史センター

日本山岳会で高橋健治さんやローゼさんに縁のある人たちが集う会があると知り、特にローゼさんの生涯に関心があり10月25日上京し、市ヶ谷のルームに向かいました。

高橋健治さんは、今西錦司、西堀栄三郎さんと共に三高（現京大）の3羽がらすと評されて活躍。クライマーでスキーの名手でした。ローゼさんは、1929年21歳の時にベルリンか

らたったひとりで日本に来ました。

神戸のドイツ系の商社に勤めながら、ドイツ語を教えていたそうです。1932年、北海道でアイヌ民族を訪ねる旅で、植物生態学者でもある高橋健治さんと出会い、翌年結婚。健治さんは京都の古木商の息子で、結婚には反対されたようです。ローゼさんは素敵な美人です。

二人でよく旅をしましたが、健治さんは47年、結核で死去。生前には笹ヶ峰ヒュッテの建設を果たしました。ローゼさんは、その後半世紀を日本に留まり、遺児エリザベスを育て、健治さんと訪れた雪国の人々を愛し、「北越雪譜」の独訳・英訳を成し遂げ、世界平和にも貢献し、2002年1月22日93歳で亡くなりました。

戦時中は経済的にも大変な苦勞をされたようです。京都で語学を教えて生計を立てますが、健治さんの死後は法政大学で初の外国人教師となり、多くの学生に慕われたそうです。転居した横浜や川崎でも英語や独語を教え、その数は3000人に上ったとか。高2（1958年）の頃から英会話を習ったという坪井靖子さんの語ったローゼさんのお話にとても感動しました。坪井さんは45年も長い間、ローゼさんと親交がありました。ローゼさんが最も力を入れたのはモア・ジョイ会の活動でした。「喜びを分かち合い、平和のために人々の相互理解を助けよう」と力を尽くされました。「与えることは生きること」というモットーを柱に実践したローゼさん。

新潟県の瓢湖の自然保護にも関心を寄せて、素晴らしい写真を残しています。多くの方がローゼさんと高橋健治さんを語りました。企画した緑爽会の近藤緑さん、京大学士山岳会の斉藤清明さんは、毎日新聞の記者をされていた方で健治さんの登山家としての活躍や植物生態学など多面的な仕事を紹介。「北越雪譜」に関するエピソードを語った吉田理一さん。司会の芳賀孝郎さん。そして、ローゼさんの活動を引き継いでいるモア・ジョイ会のたくさんの参加がありました。

明るく颯爽と生き抜いたローゼさんの生き方に感動しました。「平和を築くためにできることをしましょう」という教えに私も学びたいと思います。



8.10 銀河通信25周年を祝う会の参加者と

会場風景  
25年間をスライドショーとパワーポイントで



実行委員の皆さんと中央が夫・澄生です。

撮影・三田英二さん・油谷良清さん

参加が叶わなかった読者からお祝いを沢山頂きました。当日の資料や写真などに一部使わせて頂きました。残りは、今後の印刷・送料に使わせていただきます。ありがとうございました。

(敬称略) 伊藤久次郎・関口興洋・原広美・高島拓生（北九州市・連名で）神原照子（登別市）前原満之（宮崎市）押野記代子（札幌市）山本敏子・伸之（東京・江戸川区）大庭保夫・太洋子（加賀市）福田光子（秋田市）新妻徹（札幌市）計56,000円と三浦恵美子（旭川市）ワイン、里見清子（山梨市）ワイン、北川麻利子（札幌市）押し花額縁

購読料をありがとうございます（敬称略）  
2013.7.26~10.18

土岐政美（札幌市）高野ケイ（札幌市）吉野勝男（日高町）カンパ含む 松川洋子（札幌市）川嶋新太郎（東京・台東区）飯部紀昭（札幌市）高橋春枝（札幌市）蓬田三枝子（札幌市）カンパ含む 芳賀孝郎・淳子（札幌市）村上力（釜石市）カンパ含む 三上妙子（札幌市）森武昭（狛江市）中村秀子（千歳市）カンパ含む 津村靖代（札幌市）切手 阿部一子（福島市）切手 計30,000円と切手は印刷代と送料に使わせていただきます。

加藤幸子（東京都・作家）「加藤幸子自選作品集3」、高澤光雄（札幌市）著書「山旅句 エッセー集」を寄贈して頂きました。合わせてお礼申し上げます。